

一般講演要旨

第1群 ホルモンに関する問題

1. 巨大乳房症の1例

(山口日赤) 熊本 有宏
(九州大) 楠田 雅彦

稀な巨大乳房症の1例を報告する。

患者は18才の初妊婦で、妊娠2カ月の初より次第に両側乳房の腫大を来し、妊娠3カ月末には自分の両腕に抱え込むほどになると共に脹るような痛みに苦しむようになった為我々の婦人科に入院した。

入院時の一般診察所見に著変はなかつたが、両側乳房は各々過人頭大でほぼ対称的に腫大しており、皮膚表面は充血し著明な妊娠線と静脈の怒張を認め乳量も拡大していたが色素沈着は軽度であつた。触診にて軽度の局所熱と硬結があつたが圧痛は軽く乳汁の分泌は認め得なかつた。一般検査では軽度の貧血と赤沈値の促進を示すのみであり、肝機能、血清電解質、血清蛋白分層も全て正常であつた。尿中総 17-KS は 6.4 γ /day, 尿中Estrogen は Total 値で 118 γ /day, PBI は 5.6 γ /dlであつた。試験切除による乳腺の組織像は結合織の増殖が著明で腺腔の拡大と Hyperplasia があつたが悪性変化は認められなかつた。

妊娠4カ月に入つたところで人工妊娠中絶を行い、Dexamethasone の投与を続けたが乳房は疼痛が消失したのみで大した縮小も示さなかつた為美容的な意味で乳腺の部分切除を受けた。本患者はそれから約1年後に再び妊娠したが、残存乳腺が前回同様の所見を呈してきたのでついに乳房切断術を施行した。

2. カッシング症候群の1例

(熊本大) 水元 淳一, 竹本 純一

副腎腫瘍により起こるカッシング症候群はかなり稀なものとされ文献上も数百例を数えるに過ぎない。カッシング症候群は非常に多彩な症状を呈し、その部分的一症状に過ぎない高血圧、糖尿病、肥満症等としての治療を受けることが少なくない。演者は最近糖尿病として治療を受けていて、無月経を主訴として婦人科を訪れたカッシング症候群の1例を経験し、婦人科的検査を中心とした観察を行ない腺腫と推定し得、更に手術を行なう機会を得たので合せて報告する。

3. 性器形成異常の管理についての臨床的考察

(慈恵医大) 小川 重男
岩沢 昭二, 小幡 功, 佐藤 恒雄

性腺の発生障害を含めた性器形成異常例は昭和40年1月より昭和41年7月までに23名でその間の外来新患者の0.3%に相当する。主訴別の内訳は、陰核肥大9例、陰核肥大兼陰裂癒合1例、陰裂癒合2例、腔欠損10例、全身發育障害、翼状頸、肘内反1例で、最後の症例はTurner氏症候群であつた。この中、12例についてその個体の性の決定のために、性染色質、内分泌学的検査、性器所見、性腺所見、社会的因子の分析を行つた。染色体分析は症例が少ないので今回の報告には含まれない。陰核肥大の5例中4例及び陰裂癒合の1例に母体の妊娠中の薬剤使用があり、陰裂癒合の症例では腔欠損も合併した。陰核肥大の残りの1例は先天性副腎過形成であつた。内分泌学的検査では先天性副腎過形成の症例以外に高Pregnaneetriol 値及び11deoxy/oxyの逆転も見られなかつたが3例に17-KGS/17-OHCS 値の増大が見られた。腔欠損4例中2例は片側性腺は夫々ソケイ管内、ソケイ管外皮下に存在したが組織学的には卵巣で睾丸性組織要素は認められなかつた。先天性副腎過形成には陰核切断、副腎皮質ホルモン連続投与を行い他の症例には夫々陰核切断、外陰成形を行い、造陰術は20才以上の症例のみに行つた。尚本症の管理上、社会的観点より屈出された性は保存されるべき事及び患者の精神的苦悩の解決に医師として協力する事が重要と考えられた。

4. 自律神経・精神安定剤による排卵誘発法(その4)

(慶応大) 坂倉 啓夫
飯塚 理八, 村田 高明, 曾 敏明

我々はかねてから自律神経精神安定剤の投与により排卵誘発法を試みてきた。現在迄延1,800全周期、延1,215人に至り、407周期(22.6%), 278人(22.9%)の排卵誘発を得るに至つた。我々は先に薬剤の選択的投与方法により、人数別で38.9%の排卵率を挙げたことを報告した。その薬剤の選択的投与方法にはその前段階のScreeningとして自律神経機能をMecholyl Test, 精神的内面的なものを検索するためにCornell Medical Index,